

音空間 他人と共有せず

平成を歩く

音楽が流れる。それら現実の音と、人が認知する音はかなり違う。興味深い調査がある。

場所はBGMやイベント情報を放送している福島市内の商店街。平成13年、福島大学大学院生だった大門信也さんと准教授の永幡幸司さんが調査したところ、利用・通過経験のある大学生や市職員、公民館利用者のうち、約65%が放送を聞いたことがないと答えた。通行人にも尋ねたが、やはり3割近い人が音楽に気づいていなかった。

聞いていない人の回答だと、肯定的な印象が目立つ。ところが

「忘音」完備

実際は気にとめていない人が多いのだ。「端的に言って、必要がないからでしょう」と永幡さんは説明する。情報が得られたり、情緒を感じる音でない聞き流すようになるらしい。

その商店街に向かった。今も洋楽ポップスが流れている。むしろ昔の商店街とは違って、物売りの声が飛び交うわけではない。せめて音楽で活気を、という思いがあるのだろう。音量はつましい。平成的な気配りの響きと言えるかもしれない。あたり構わぬ大音量はもはや時代錯誤でしかないのだから。

「外国にいくと、音楽のように日本の音がよみがえる」と演出家の渡辺和子さんは言う。ドイツに住んで40年余り。現地で初演した「羅生門」は音を生かした幕開けが評判になった。

暗い舞台に驚きの男が歩く音がする。女が米をとぐ。大根を刻む。大工がカンナをかけ始める。生活の音が立ち上り、夜が明けていく。体にしみこんだ音を演出に使ったのだ。

この舞台を平成11年、東京で再演して以来、来日する機会も増えたという。帰ってくるたびに、どんな音が聞こえますか？

「うーん、何も聞こえませんがね。あまりにも音が多過ぎて、頭の中でシャットアウトしているのかもかもしれません」

まさか。しかし我が身を振り返って、ぎょっとした。朝、家を出て渡辺さんと待ち合わせるまで、どんな音を聞いたというのだろうか。思い出せない！

街はにぎやかな。車が行き交い、駅にはアナウンス、店頭



「遠い声」 写真・高梨豊

永幡さんによると、かつて騒音は量の問題だった。道路や工場などの大音量。これらに対しては工学的な抑制策が取られてきた。その結果、近隣騒音のようになり「それぞれのとらえ方で変わるような質の問題が次第に顕在化してきた」と見る。

街の音は論議にさらされるようになった。中島義道著「うるさい日本の私」が刊行されたのは平成8年のこと。交通機関や公共施設の注意放送など、「音漬け社会」との戦いをつづけた本だが、タイトルの「私」が示唆的だ。私にはこう聞こえる、という個人のとらえ方を貫いた抗議の書だったとも言える。

携帯機器の普及で、個人の音空間を持ち歩く人も増えた。携

音環境をめぐる変遷

- 昭和54年 (1979年) ウォークマン発売
- 平成元年 (1989年) JR新宿駅などで発車合図のメロディーを試行
- 2年 音もれ防止のヘッドホン相次ぐ
- 4年 近隣騒音5か国調査発表。日本人の対策は「我慢する」が65%
- 5年 日本サウンドスケープ協会設立
- 8年 環境庁(当時)が「残したい日本の音風景100選」決定
このころ、パースメーカーへの影響から携帯電話マナーが問題に
- 9年 NTT、天気予報を人工音声に
- 15年 JRや地下鉄など関東の鉄道17社が車内の携帯電話ルールを統一
- 16年 日本民営鉄道協会での迷惑行為調査で携帯使用が5回目で初めてトップを譲り、2位に。1位は「座り方」
- 19年 音声合成ソフト「初音ミク」発売



日本民営鉄道協会のマナーポスター(平成18年)

にぎやかなのに聞こえない

ただ古きよき街の音を知らない世代は、新たに平成の音を見つけるのかもしれない。例えば平成になって普及した駅の発車メロディー。ネットの動画サイトではJR東日本の発車メロディーのピアノ独奏が人気を呼び、楽譜まで出版された。

携帯機器iPodを使ったポッドウォークも広がる。慶応大学准教授の加藤文俊さんは学生と実践してきた。例えば下町で地元の人と散歩し、会話を周囲の音を収録する。それを聞きながら、同じ道を歩くことができる。「複数の音の受け取り方があることが分かって、街に対する意識が高まる。蓄積していけば、音の風景を将来に残すこともできるんじゃないか」

携帯機器も使おう。他人と音を共有することは、同じ空間に生きる実感を取り戻すことにもなるだろう。(前田恭二)

サウンドスケープ カナダの作曲家マリー・シェーファーとを目指す。現代の音環境は劣悪で、「騒音公害は人間が音